

高等教育で育成する能力等についての説明（第5回 WG） 座長：奥田一雄

さて、ここからは主として地域協働学部からいただいた共通教育の理念・目的に関するご意見ご指摘に沿って進めていきたいと思います。

最初に、本学の共通教育の理念・目的についての根本的な議論がなされていないことが指摘されています。これと併せて、現在再編しようとしている共通教育のありかたは、本来は現行の共通教育の評価と検証がまずあって検討を始めるべきであるという至極もったもなご指摘であります。なお、このことは先般第2回 WG に対する教育学部からの回答内容にも含まれていたことです。

第1回 WG において、本再編 WG は現在の共通教育の理念を変更するものではないと座長から申し上げました。それは共通教育再編に要する時間的な制約もありますが、それよりも、後述するように、一言で言えば、本学の学士課程における教育方針は、「総合的教養教育」を基盤とし、「地域協働による教育」を実施することであると認識しているからであります。これは第3期中期目標・計画の内容です。（参考資料1の50ページと51ページになりますが、赤線の部分を参照してください。）その基本的なスタンスは第4期にも引き継がれていると判断できるからです。（参考資料1の56ページは第4期素案ですが、その左側の赤の下線部をご覧ください。（4）・・・視野を広げるために他分野の知見にも触れることで、幅広い教養も身に付けた人材を育成する（学士課程）。とあります。また、その右側の赤の下線部の（4）-1に、・・・地域課題の発見力とそれを解決する行動力を涵養する・・・【7】とあり、（4）-2に、・・・深い専門性や幅広い教養、それらを統合して社会に働きかける能力等を育成する・・・【6】とあります）。なお、今回配布していますこの第4期の素案は前回配布のものから若干変更されており、その変更部分は青文字の見え消しで示されています。

ただし、第3期中期目標期間中に国などから大学に求められてきた「数理データサイエンス・AI教育」のカリキュラムへの導入については、本学の学士課程教育において、それに関する新たな教育目的や科目編成の考え方を追加して構築する必要があります。「数理データサイエンス・AI教育」は第4期素案に記

載されていますが、前述のように、これは第3期の目標の拡充とも解釈できると考えています。

そうであったとしても、現行共通教育の検証をおろそかにするものではありません。共通教育実施委員会では毎年各分科会で自己点検・評価等の活動総括がなされ、また、教育の質保証の観点で、学生の成績評価の適切性などの点検を行ってきています。さらに、平成28年度から令和元年度まで実施してきたいわゆる AP 事業において、共通教育を含めた全学の学士課程の成果等について評価・検証を行ってきています（参考資料3を参照）。共通教育の目的・カリキュラム構成・実施体制を組み立てていく中で、これらの評価・検証結果を十分に活かしていかなければならないと考えています。

繰り返しになりますが、本学では、第2期中期目標期間中に学内で「総合的教養教育」を構想・検討し、これを推進することを決めました。その結果、2016年から始まる第3期中期目標・計画に、「総合的教養教育」とそれを実現する「地域協働による教育」を実施することを盛り込みました。その2016年には、総合的教養教育に関するWG報告がなされています（59ページからの参考資料2を参照）。このWG報告では、本学における教養と総合的教養教育の概念、それぞれの内容と特徴について詳細に説明されています。その概要は以下の通りです：

本学の学士課程におけるディプロマ・ポリシーは、4つの領域で定義し、その内訳として学生が修得すべき10の能力を挙げています。さらに、個々の学生が培ったそれら10の諸能力を統合して他者へ働きかける力を育成することを総合的教養教育と呼んでいます。つまり、総合的教養教育は、学生が学び、体験した様々な知識・技能・資質などが学生自身の内部で統合され、その結果、世の中に働きかけ、活用することができる汎用的な能力（すなわち、+1の能力）を育成するという本学独自の教育のありかたであるということです。なお、10+1の能力については、共通教育履修案内にも掲載されています。

現在、本学のHPで掲げている高知大学の理念と基本目標はこの第3期中期目標と同一のものです。また、共通教育においても、「この基本目標を達成するた

め、共通教育の授業科目を、初年次教育を担う初年次科目（初年次教育科目）と、幅広い教養を身につけるための教養科目に区分し、カリキュラムを編成する」とHPで謳っています。来年度第4期が始まるときに、HPに掲げている本学の理念と基本目標はそれに伴って変更されるでしょう。しかし、先程申し上げた「総合的教養教育」とそれを実現する「地域協働による教育」を基盤とした本学学士課程教育について、「卒業時における質保証の取組の強化」というテーマで2016年度から2019年度まで行った大学教育再生加速プログラムの成果があります（69ページからの[参考資料3](#)参照）。また、少なくともこれから2年間は現行のSRUの概念も維持されるし、座長としては、先程も述べましたとおり、教育方針の基本的な内容の多くは第3期を受け継いでいると考えているところです。

次は、大学教育で育成すべき人材の能力に関し、文科省等の審議会の答申内容と本学の学士課程教育で育成する能力との関係を見ていきますが、ここまでのところで何かご質問・ご意見等がありませんでしょうか？

[それでは31ページからの資料2](#)をご覧ください。

ここでは、大学で身につけるべき力について、文科省等の審議会などの答申内容を時系列で取り上げたものです。順番に簡潔に見て行きます。

まず、1997年の大学審では、「主体的に変化に対応し得る幅広い視野や総合的な判断力と豊かな創造性を持つ人材を養成すること」が謳われています。

1998年の大学審で、主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探究し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力、つまり課題探究能力が初めて取り上げられました。

グローバル化に対応して、地球規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点を持ち、また、科学・技術の進展に対応するため、正確な理解力と的確な判断力を育成することが、新しい時代の教養教育であるとして2002年の中教審で答申されました。

2005 年の中教審では、知識基盤社会に対応するため、専攻分野についての専門性、幅広い教養、高い公共性と倫理性を身につけ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、社会を改善していく資質を育成することが謳われています。この中教審答申は、本学の総合的教養教育を検討するベースとなったものです。

次の 32 ページにいくと、2008 年の中教審において、「学士力」という概念が提起され、学士力が知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力という 4 つのカテゴリーから構成されることが謳われました。

2012 年の中教審では、この「学士力」の内容を柔軟に捉え、我が国の歴史や文化に関する知識や認識、多元的な文化の受容性を有し、批判的・合理的思考力、社会的責任を担い得る倫理的・社会的能力、総合的な学習に基づく創造力・構想力、想定外の困難に際して的確な判断ができる教養、知識、経験を含む汎用的能力を育むものとされました。

2013 年の中教審、第 2 期教育振興基本計画の中で、知識基盤社会で自立して生き抜くために、「生きる力」、すなわち、生涯にわたって学び続け、主体的に考え、どのような状況にも対応できる課題探求能力を有する多様な人材を育成することが謳われました。

同じく 2013 年の教育再生実行会議では、これからの大学教育等の在り方について、課題発見・探求能力、実行力などを含む『社会人基礎力』や『基礎的・汎用的能力』などの社会人として必要な能力を有する人材を育成することが重要であるとししました。なお、『社会人基礎力』は経産省が 2006 年に提唱した概念であり、『基礎的・汎用的能力』は 2011 年の中教審がキャリア教育と職業教育の在り方について答申した内容を受けたものであります。

次の 33 ページに移り、2014 年の中教審の高大接続答申では、再び「生きる力」を培う重要性に触れ、生きる力を構成する豊かな人間性、健康・体力、確かな学力を育成することとしています。

2015 年の教育再生実行会議では、これからの時代に求められる資質・能力とし

て、主体的に課題を発見し、解決に導く力、志、リーダーシップ；創造性、チャレンジ精神、忍耐力、自己肯定感；感性、思いやり、コミュニケーション能力、多様性を受容する力を挙げました。

そして、2018 年、中教審の第 3 期教育振興基本計画で、AI・IoT・ビッグデータ等の産業構造の改革を促す情報技術を基盤とした人材を育成することが取り上げられました。AI を中心とする技術革新を養成すべき人材像と絡めたのはこの答申が最初です。

2018 年の文科省の Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会において、読み書き・対話する力；科学的・数理的素養；文理双方の分野の学修と AI に関する素養の修得が重要課題であると示されました。

私個人の感想ですが、これ以後、従来まで提起されてきていた、大学教育で育成する能力に関するトーンががらっと変化したように感じます。また、これと関連して出された 2018 年の中教審の 2040 年にむけた高等教育のグランドデザイン答申でも、AI、IoT 等の研究開発のための人材育成の必要性を挙げています。

このような流れは、2019 年の教育再生実行会議へ受け継がれ、新たな時代のリテラシーとして文系・理系の垣根なく全ての学生が AI・数理・データサイエンスの基本的な素養を身につけ、新たな価値を創造する能力を育成するとあります。そして同年 2019 年に内閣府から AI 戦略 2019 が提出されました。

以上が審議会などの答申内容と社会情勢による変遷についての概要です。

次の 34 ページからは、前回の WG で座長から学士課程教育で身につける能力について、専門知識よりもむしろ社会人基礎力のような「汎用的能力」や「人間力」が求められていると申し上げたことと関連します。

先の審議会の答申内容と重複しますが、ここでは「人間力」「就職基礎能力」「社会人基礎力」「学士力」「基礎的汎用的能力」のそれぞれの内訳中身について見て行きたいと思いますが、そのときに、人材養成の主要目的は異なるけ

れども、育成する能力のリストはほとんど同様であるという点に注目していただけだと思います。これら5つの力の提言のあと、2018年からAI・数理データサイエンスの素養が求められることになります。

→まず、「人間力」は、社会を構成し、運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力であると定義され、ある意味、「生きていく力」「汎用的能力」に通じるのではないかと考えます。

→知的能力要素に基礎学力、論理的思考力と創造力が含まれ、社会・対人関係力要素には、コミュニケーションスキル、リーダーシップ、公共心、相互啓発力が含まれます。自己制御的要素には、意欲、忍耐力、自己実現力などが含まれます。

つぎの37ページに、「就職基礎能力」、これは社会人として就職して働くために必要な力をまとめたもので、コミュニケーション能力と表現力、責任感・向上心、それから基礎学力として読み書きと数学的思考などが挙げられています。

次の38ページは社会人基礎力、これも社会人として職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な能力を挙げたものです。前に踏み出す力として、主体性、働きかけ、実行力。考え抜く力として、課題発見力、計画力、創造力。チームで働く力として、表現力、コミュニケーション能力、倫理観などが含まれています。

そして39ページの学士力です。知識・理解というのは、専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解すること、これは専門教育に相当しますが、それだけではなく他分野・異文化に関する知識や人類の文化・社会・自然に関する知識を理解することも含まれます。知的活動でも職業生活や社会生活においても必要な技能として「汎用的技能」を挙げ、コミュニケーションスキル、数学、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力を含んでいます。態度・志向性の中身は、自己管理力、チームワークとリーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯にわたって学び続けることです。4つ目の総合的な学習経験と創造的思考力には、課題発見・解決能力が含まれています。

次は 40 ページの「基礎的・汎用能力」についてです。これは学校を卒業して社会で自立するために職業に就く際に必要なキャリア教育の内容を提起したもので、先の「社会人基礎力」と共通性をもつものです。その中身は、自分を知り他者を理解し、コミュニケーションが取れることとチームワーク・リーダーシップが取れること。自己を肯定し、主体的に行動し、忍耐力をもつこと。課題を発見し解決する能力。多様性を理解し、自分の生き方を設計することなどが含まれています。

→いままでぐだぐだと時間をかけて育成すべき能力の具体例を見て来ましたが、本学の教育目標、とくにディプロマ・ポリシーにおいて培う能力をこれらの能力と比較し、妥当性や適切性などを認識するためです。

本学の 10 の能力は、専門分野に関する知識、人類の文化・社会・自然に関する知識、論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自立力、倫理観からなっています。これらの能力はほぼ「学士力」などであげられた諸能力と重なっています。

それから、+1 の統合・働きかけの能力については、「人間力」の中の「自己制御的要素」にあたり、「社会人基礎力」においては前に踏み出す力に相当し、また、「基礎的・汎用的能力」における人間関係形成・社会形成能力にあたるのではないかと考えています。

以上、本学で育成する 10+1 の能力と、人間力、社会人基礎力、学士力などで挙げられている能力との関係について見て来ました。

→先にも述べたように、超スマート社会 Society5.0 の概念が出されたときから、文系・理系の両方の知識を修得し、AI・数理データサイエンスの素養を身につけた人材、とくに人文社会科学系を専攻する人材を育成することが求められるようになりました。ここでは、Society5.0 で求められる能力・リテラシーとして、文章や情報を正確に読み解き、対話する力、すなわち日本語や外国語、情報などの読解力とコミュニケーション能力が求められます。それから、科学的思考と分析力、つまり数学的論理的に問題を発見して解決する能力、そして新しい

価値を創造するための感性、好奇心、探究力をもつ人材を育成することが重要であると謳われています。

→経産省では、令和の教育改革として3つの柱を提言しています。それらの1つとして、学びのSTEAM化と文理融合の学びを挙げています。これは新しい価値をつくるためには、数学をベースとした論理的思考、エンジニアリング・設計やデザインの発想、真理や美の追究を指向するサイエンスとアートの発想が必要不可欠であるという意味を表していると考えます。

→このような流れの中で、AI戦略2019が提起され、2025年までにリテラシーレベルのAI人材を50万人育成するという目標のもと、大学に対して数理・データサイエンス・AI教育の早急な取組を促しています。

→そして、ポストコロナ期における新たな学びの在り方についての提言では、さらにデータ駆動型の教育への転換を推進することが盛り込まれています。

ここまで、長時間にわたってご説明してきた理由は2つあります。

1つは、前回WGにおいて座長例示の教養科目区分を立てた理由の1つとして座長なりの教養科目で育成する目的を以下のように申し上げたからです。再度申し上げますと：

教養科目の目的を『社会の中で自分の立ち位置を自覚し、種々の問題について、価値観の多様性を認めながら、専門分野を超えた知識と考え方で解決する柔軟な態度と行動力を養成すること。そして、学生自身が健康で楽しく学び、同時に感性を磨き、自分の将来の夢を叶えるモチベーションを触発し、この世界と社会の中で幸せに豊かに生きていくための基本的なツールを獲得すること。さらに、幅広い分野で習得した知識とスキルを統合し、社会へ働きかける力を涵養するため。』と設定したからである、と。

この内容は、人間力、学士力、社会人基礎力、就職基礎能力、基礎的汎用的能力で挙げられている能力を、全て網羅しているわけではありませんが、含んで

いると考えています。当然ですが、座長が提案しているこの教養教育の目的については、今後の議論と同意が必要であると考えています。

もう1つの理由は、本学の学士課程で身につける能力は現行の10+1を引き継ぐのか、それとも本学の教育目的を改正し、それに伴って育成すべき能力も新たに設定するのかという問題です。

座長自身は、第4期も第3期の「総合的教養教育」と「地域協働による教育」を基本的に踏襲していると認識していますので、10+1はそのまま維持して良いと考えます。しかし、これについては、本学における教育の基本方針と目標そのものなので、当該WGで協議するというより、もっと上位の委員会または役員会がお決めになるべきものと考えます。

一方、新たに設定される本学の教育の基本方針と目標によって、それに包含される共通教育の目的が定まってくると考えられますが、中教審や文科省、内閣府などから大学教育に関して提言される内容を入れながら、再編する共通教育においてどのような能力を培うのかという平易な文言や文章は、たとえば、学生へのメッセージとして履修案内に記載する程度の内容をベースに、本WGで検討しても良いのではないかと考えています。WG報告書には、その検討結果を記載し、共通教育の理念または目的として全学へ提案することは意味があると思っています。

本学の共通教育を全学の学部とセンター等の教員が支え、自律的に運営するという全学出動体制については、座長は以下の信念をもって取り組んでいます。世界や社会に存在する問題のほとんどはいくつもの学問分野が協働し、文理融合的および総合的・多角的に分析して解決しなければならないものです。そのように問題を俯瞰的な視野で捉えて解決していくための幅広い知識と汎用的な能力を培う重要なカリキュラムは、共通教育が担っていると考えています。この共通教育が果たすべき機能と責任をしっかりと担保し、共通教育の再編を進めて参ります。